

日本近代における「陶彫」の創始者とその定義についての一考察

—寺内信一と沼田一雅の比較を通して—

西村佳菜子（崇城大学大学院）

明治の幕開けと共に、日本に「彫刻(Sculpture)」概念を持ち込んだのは工部美術学校のお雇い外国人ラグーザであったが、同校で彼の生徒であった寺内信一(1863-1945 年)と同級生の内藤陽三(1860-1890 年)が、工部美術学校で学んだ塑造法や石膏型取り法、大理石の彫法、美術解剖学などを活かすため、常滑の地で陶による彫刻、すなわち「陶彫」制作や塑造に関する講義をいち早く開始し、引き続き瀬戸陶器学校や有田工業学校、砥部工業徒弟学校などで生徒に陶彫制作や塑造に関する指導を行ったことはほとんど知られていない。一方で、「陶彫」の制作開始が寺内や内藤より若干遅いにも拘らず、「陶彫の父」として一般に広く知られているのは、東京美術学校彫刻科教授であった竹内久一に師事し、セーヴル製陶所において陶による立体造形法を学び、日本陶彫会の創設者となった沼田一雅(1873-1954 年)である。後者に関する文献の中には、彼を「陶彫の創始者」と位置付けているものすらある。

本発表では、このような矛盾が生じた理由を解明するため、まず寺内信一と沼田一雅のそれぞれの生涯や功績、弟子たちについて、表や作品を示しながら、整理ならびに比較を行う。続いて、両者に関する研究論文や、両者に関する言及がなされている単行本や図録、報道記事などを洗い出し、時系列的に整理することで、彼らが美術界や産業界、また美術・工芸史上でどのように位置付けられてきたのかを明確にする。また現在、陶を用いたオブジェや招き猫などの縁起物、あるいは彫刻作品は「陶彫」として一括りにされる傾向があるが、同用語の厳密な使用の開始時期や定義、ならびに美術・工芸界における同用語の浸透過程を明示したい。次いで、両者の作品の中から、比較可能な肖像や婦人像、老婆像、仏教主題の作品、素描をそれぞれ抽出して、造形的、技術的観点から比較を行う。また同時に、それぞれがどのような人物から影響を受け、その影響がどのように作品や制作に反映されているのかや、両者の遺稿や書簡を精査して、それぞれの芸術観や思想がどのようなものであったのかについて指摘ならびに比較を行う。

最後に、以上の諸点からの比較結果を総合して、寺内が「陶彫」史上にその名を留めることなく終わり、一方で沼田がその「創始者」あるいは「開拓者」として仰がれるに至った理由や経緯と、「陶彫」の定義について発表者の結論を導く。